

古代における善光寺平の開発について

旧長野市街地の条里遺構を中心に

Ancient Development in the Zenkoji Plain:
Focussing on the Jori System Sites in Old Nagano City

福島正樹

はじめに

①善光寺平の条里

②旧長野市街地の表面条里の復原

③発掘調査の所見から

結びにかえて

【論文要旨】

善光寺平（長野盆地）は、千曲川・犀川によって形成された最大幅10 km、南北30 km、面積300 km²の長野県内で最も広い盆地のひとつである。この地域は、古代においては、更級・水内・高井・埴科の4郡があい接し、『和名抄』に記載された郷の数や式内社の数をみると、信濃国で最も分布の密度が高い地域で、早くから開発が進んでいたところである。本稿はこの地域の条里的遺構について、特に旧長野市街地に存在した条里的遺構について検討を加え、用水体系との関連から古代における開発について検討したものである。

まず、この条里的遺構が旧長野市街地全体を覆う統一的なプランによっていること、この統一性は、用水体系からも裏付けられ、裾花川から取水された鐘鑄堰（川）・八幡堰（川）の計画的開削と合わせて施行された可能性が高いこと、施行の時期を直接示す考古学的データは今のところないが、更級郡の石川条里遺跡、高井郡の川田条里遺跡、埴科郡の更埴条里遺跡のいずれもが発掘調査の結果、条里地割の施行は8世紀末から9世紀初め頃であることが判明したことから、水内郡においても同様の時期と考えられることなどを論じた。

また、近世以前の善光寺東門・西門を結ぶ線（現在の仁王門）が条里的遺構の上に乗る、近世には「中道」と呼ばれていたことから、この線が高井郡へと向かう古代の官道の系譜を引くものである可能性について触れた。

最後に、以上の仮説から想定される8世紀から9世紀にかけての善光寺平の開発の諸段階について、現時点での考えを示した。

はじめに

善光寺平⁽¹⁾は、千曲川・犀川によって形成された最大幅10km、南北30km、面積300km²の長野県内で最も広い盆地である。その南端の標高が360m、北端が330m程で、高度差が30mときわめて小さい。古代においては更級・水内・高井・埴科の4郡があい接し、『和名抄』に記載された郷の数や式内社の数でみると、信濃国で最も分布の密度が高い地域で、早くから開発が進んでいたところである。この地域はまた、条里地割の分布が長野県でも最も広範囲にわたっている。本稿では、この善光寺平に分布する条里地割について分析を加え、古代における開発について考えてみたい。⁽²⁾

①……………善光寺平の条里

(1) 研究史概観

地表面に残る条里地割とは別に、地表面下に埋没した条里遺構が存在することは、善光寺平南端の更埴市大字屋代・雨宮の水田(更埴条里遺跡)を素材に昭和36年(1961)から同40年(1965)にかけて総合学術調査が行われ、その報告書である『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』(長野県教育委員会1968)によってはじめて報告された。現在の地表面に残る条里遺構と埋没した条里遺構とは区別して考える必要があることがはじめて明らかにされたのである。これを契機に、地表面に残る条里地割(表面条里)が単純に古代の律令制の時代にまでさかのぼることができないことが全国各地で確認されるようになった。

この更埴条里の総合調査の視角を具体化して検討した嚆矢は、『長野県史』通史編原始古代1(長野県史刊行会1989)である。ここでは、信濃全体の条里遺構についてはじめて体系的にまとめるとともに、条里遺構を表面条里と埋没条里とに分けて検討している。具体的には、更埴条里(更埴市)、石川条里(長野市)、新村条里(松本市)の地割と用水、とりわけ1枚の田圃への水回しと発掘調査によって確認された「水口」に視点を据え、多角的検討が加えられている。また、旧長野市街地⁽³⁾について、尾張部地区を中心とする表面条里の復原案が提示され、『長野市誌』(註(2)参照)での叙述の直接の前提となっている。しかし、ここでは長野市域全体の検討にまではいたっていない。なお、これに先立って、歴史地理学の観点から、降幡由紀子「信濃における地形と条里」(『人文地理』31-6 1979)が発表され、信濃全体の条里の概観を行い、条里地割と古墳分布、東山道のルートとの関係などが検討されている。

その後、小穴芳実「善光寺平の条里瞥見」(『地域史研究法』信毎書籍1992)・小出章「善光寺平の条里遺構」(『文化財信濃』18巻4号1992)が出され、更埴市八幡地区、長野市篠ノ井石川地区、旧長野市街地の条里復原が試みられている。さらに、長野旧市街地のなかで、条里遺構が残っていた「尾張部」地区について、地域の人々の手によって『ふるさと北尾張部』(北尾張部郷土史編集委員会1992)が出されている。これらは、『長野県史』を除き、いずれも地表面に残る条里的遺構や地籍図などに基づくものであった。

こうした流れの中で、1980年代から90年代にかけて、長野自動車道・上信越自動車道・北陸新

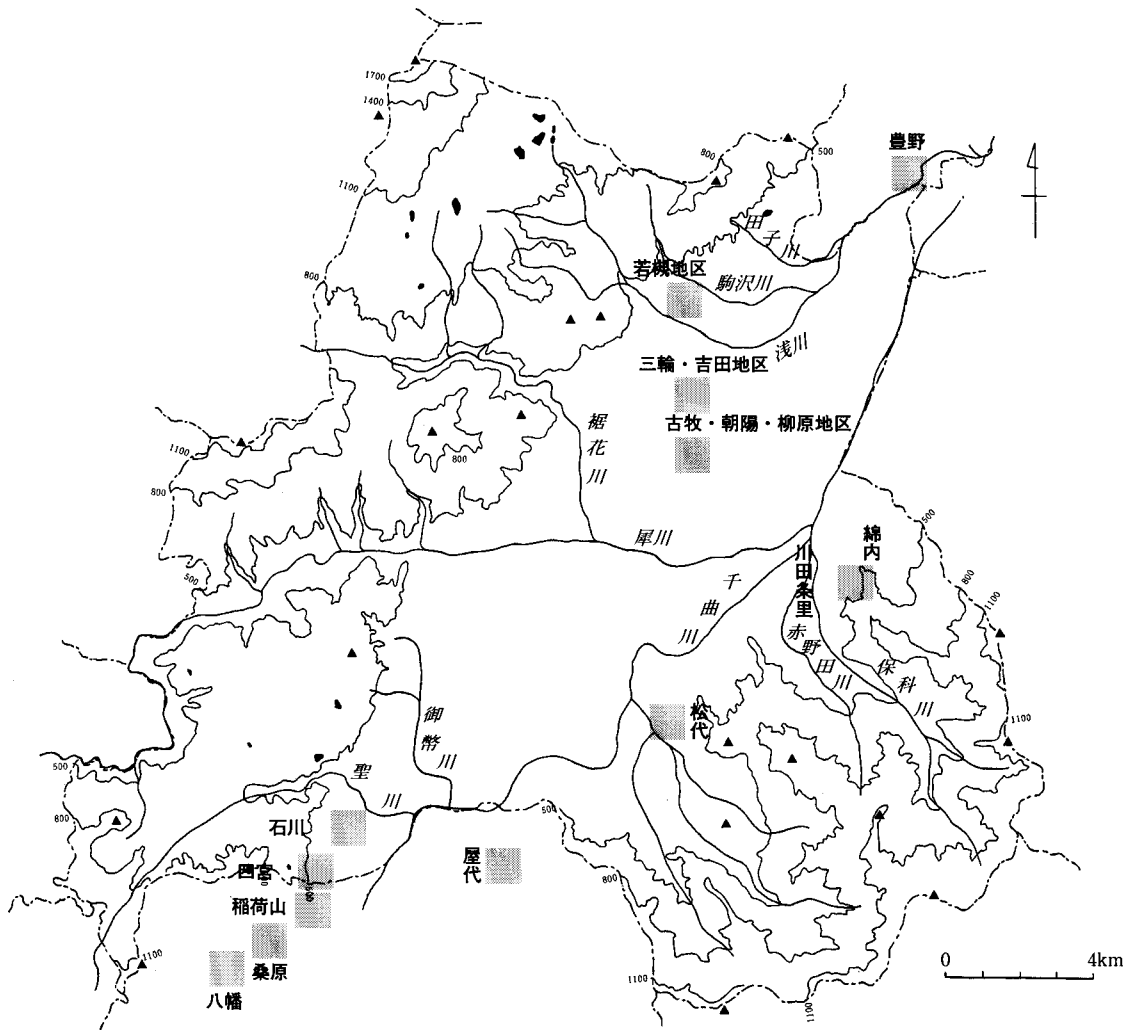


図1 善光寺平の条里遺構の分布 (概念図)

幹線、あるいは長野オリンピックなどの各種開発事業などに伴う発掘調査によって、石川条里遺跡、川田条里遺跡、更埴条里遺跡などの水田遺跡が調査された。⁽⁴⁾

そこで、個別の検討に移る前に、これらの研究や発掘調査によって明らかになった点を概略まとめておきたい。なお、長野市域は、古代の埴科・更級・高井・水内の4郡にまたがるので、ここでは古代の各郡ごとに分けてまとめることとする。

(2) 条里遺構の概観

① 埴科郡の条里遺構

当郡の表面条里は、長野市松代地区にも一部存在するようであるが、その中心は現在の更埴市大字屋代・雨宮地区のもので、ここに更埴条里遺跡・屋代遺跡群が立地する。ここは埴科郡の倉科郷、大穴郷、屋代郷に比定される地域で、屋代遺跡群からは7世紀後半～8世紀前半の木簡が130点ほど出土している。この地域の現在の灌漑は、更埴市より上流の坂城町付近で取水された「屋代用

水」によってなされている。発掘調査では、古代における開発の特徴について、千曲川ないしその旧流路から取水した大規模な用水堰（現在の屋代用水）を用いた開発が行われたことが明らかになった。更埴市屋代から雨宮地区にかけての調査区で、自然堤防を越えて水を回す人工的な開発によって掘削された大溝（用水）の存在が確認され、しかもその開削時期が古墳時代後期にまでさかのぼることが明らかにされたのである。また、この遺跡では、仁和4年（888）の千曲川の洪水によると推定される砂層によって覆われた水田遺構が確認された。発掘調査の結果検出された埋没条里の畦は表面条里とは大畦の位置ではほぼ一致すること、坪内の区画や水回しは9世紀以降の再開発で大きく変化していることが明らかになった。さらには、水田は弥生時代後期から存在するが、全面的に条里的地割が施行されたのは、8世紀末から9世紀初めであることも確認されたのである。

② 更級郡の条里遺構

当郡の表面条里は、前掲の小穴・小出両氏の研究により、更埴市八幡地区の扇状地、長野市塩崎・石川・篠ノ井二ツ柳地区の千曲川左岸の後背湿地に見られることが指摘されている。なお、川中島扇状地では表面条里の遺構が現在までのところ確認できていない。川中島扇状地は堆積力の大きな犀川によって形成されたもので、その開発は平安時代後期以降に下ると考えられている。一方、石川条里遺跡の発掘調査では、表面条里と埋没条里とは基本軸はほぼ一致するが、区画では一致しないところが多いこと、更埴条里遺跡と同様に、9世紀末の洪水砂によって覆われ、表面条里はその後の再開発によることなどが明らかにされている。

③ 高井郡の条里遺構

『長野県上高井誌 歴史編』（上高井教育会 1962）では、川田地区に残る条里型地割についてふれ、長地型が多いことなど簡単にではあるが記述されている。それによれば、当郡の表面条里は、長野市川田・綿内地区に確認できる⁽⁶⁾。また、川田条里遺跡の発掘調査で、弥生後期、古墳後期、奈良、平安、中世（鎌倉）、近世（江戸）の重層的水田区画が検出された。その結果、条里地割の施行は8世紀後半から9世紀初めにかけて行われたことが明らかになった。⁽⁷⁾

④ 水内郡の条里遺構

当郡の条里遺構の中心は、旧長野市街地に展開するものである。条里遺構の残存する地域は早くから市街地化が進んでいたが、1998年冬季長野オリンピック開催に伴う再開発の進展で、そのほとんどが姿を消した。ここは、裾花川・浅川・犀川・千曲川の四つの河川が複雑に絡んだ複合扇状地上に立地している。『長野県上水内郡誌 歴史編』（上水内郡誌編集会 1976）では、「長野市の旧市街地以東、南長池・南高田・上高田を結ぶ線以北、石綿と南長池を結ぶ線以西、浅川の以南の地であって、既に市街地化したところではほとんど残っていない（中略）特にやや明瞭に残っているのは中越の東方、石渡の西方、太田の南に至る間、桐原・返目・相ノ木以南、上高田以北、西和田以西、居町以東の間と石渡以南、南長池以北の間とは断続ながら坪割の線と思われる南北・東西の畦畔の跡が見られる」「右の地籍ほど明らかではないが、湯谷東、檀田と押田の間にもそれと思われる箇所がある」としている。その後前掲の『長野県史』で尾張部地区の表面条里が復原され、

その後も小穴・小出両氏が検討・復原している。⁽⁸⁾また、浅川扇状地遺跡群の発掘調査によって、三輪地区を中心とした地域の開発の様相の一端が明らかにされた点は重要であろう。⁽⁹⁾この点については後にふれることにしたい。なお、豊野町の石地区・浅野地区・蟹沢地区にも条里遺構があり、現在のところ信濃における条里地割の北限とな⁽¹⁰⁾っている。

②……………旧長野市街地の表面条里の復原

前節では、善光寺平における条里遺構の概観を行ったが、更埴条里遺跡、川田条里遺跡、石川条里遺跡の3遺跡ともに、条里的開発は8世紀末～9世紀前半頃に行われたことが発掘調査の結果明らかになった。このことを念頭に置きながら、以下では旧長野市街地の条里開発のようすを考えることにする。

まず、念頭に置かなければならないのは、千曲川、犀川、裾花川、浅川はどこを流れていたのか、その流路はどのような変遷をたどったのかという点である。

千曲川は現在の流路よりも東側を流れており、長野市柳原地区以東は千曲川の氾濫原であった可能性が高いと考えられる。また、犀川は長野市小松原を扇頂としてその流路は南北に振れている。その北限は、長野市大字高田の芋井神社の南に見られる1.5mほどの段丘崖で、この段丘はそのから東西に延びている。この段丘崖を境に条里地割の南限が形成されており、芋井神社の東には南向塚古墳が立地する。

『和名抄』には、水内郡には芋井・大田・芹田・尾張・大島・古野・赤生・中島の8ヶ郷が記されている。その比定地は、北限を浅川流域周辺とし、東限を千曲川とし、南限をこの段丘崖とする地域の内に、「芋井郷」「尾張郷」「芹田郷」「古野郷」などは立地していたものと思われる(図2参照)。また「大田郷」は浅川以北で、現在の豊野町を中心とする一帯に比定されている。これに対し、大島郷は小布施町大島に、中島郷は須坂市中島に遺称地を持つ。これらはいずれも千曲川の右岸で、赤生郷にいたっては遺称地も残らない。これらのことは、千曲川の流路変更によってこれらの郷が埋没ないし消滅した可能性が高いことを示している。⁽¹¹⁾

犀川は現在よりも南側の川中島扇状地を脈流しており、川中島扇状地は古代においては本格的な開発の対象とはならなかった。脈流を用水として利用した開発(上堰・中堰による布施御厨、下堰による富部御厨)は、平安後期以降御厨の開発として行われたと考えられている。⁽¹²⁾

次に裾花川と浅川である。裾花川は、現在は長野県庁の西脇を北から南へほぼ一直線に流れて犀川に合流している。しかし、この流れは近世初期に付け替えられたもので、本来は現在の長野市街地を北西から南東にいく筋かの流れになって脈流していたものと考えられている。その脈流の一つが南北八幡川(堰)で、この地域の条里水田の主要な用水となっている。つまり、南北八幡川(堰)は元々の自然流路を利用した用水ということになる。これに対し、同じ裾花川から取水する鐘鑄堰は、段丘崖下を等高線にそって開削した人工の流路である。長野市の水路図(図2)を詳細に検討すると、これらの用水に流れ込む沢水が存在する。これらの沢水と用水との関係についても検討する必要があるのである。

ところで、旧長野市街地の西北には善光寺が立地し、その西方・北方には古墳群が存在する。地

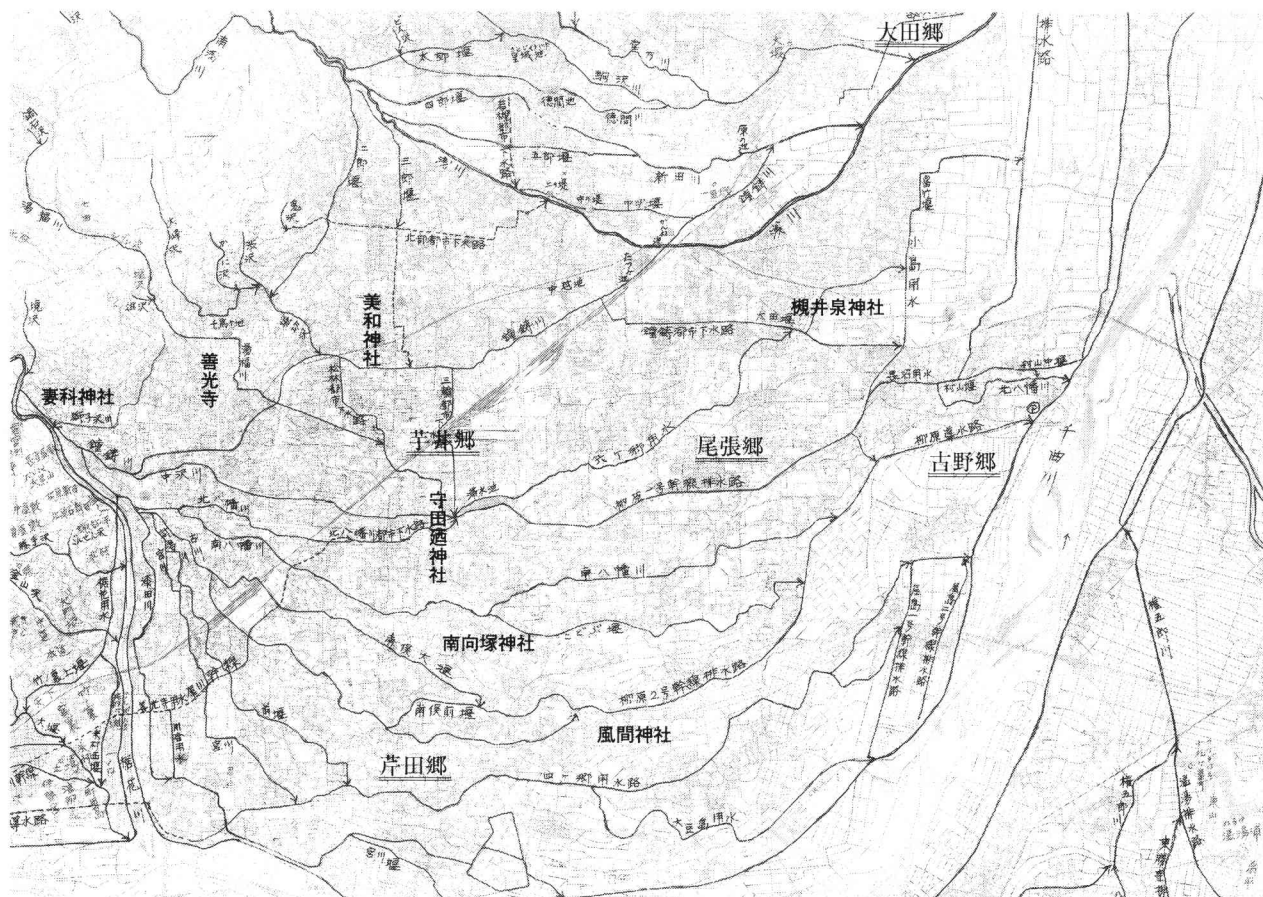


図2 用水・神社・『和名抄』郷（長野市誌編さん室作成を一部補充）

附山古墳群（古墳4内前方後円墳1，以下括弧内の数字は古墳の数），駒形嶽東平(6)，滝上山(3)，蟹沢(1)，金平社(1)，湯谷(12)，箱清水花岡平（2内前方後円墳1）などである。また、いわゆる式内社（妻科，美和，守田廼〈守田と論社〉，風間）の存在や，旧長野市街地内に比定される『和名抄』郷の「茅井郷」「尾張郷」「芹田郷」「古野郷」がこの地域に集中することもあわせて考えると，この地域が古くから開発されていた地域であることがうかがわれる。

(1) 表面条里の復原

『長野県史』通史編原始古代1では，旧長野市街地の表面条里について，「長野市三輪・平林・西和田・東和田・桐原・中越・太田などの一帯にも条里耕地がある。かなり広範囲にわたり，鐘鋳川の灌漑地帯とほぼ一致する。平林の集落はもとより平林城跡も条里線の上に位置する。また長野市高田・五分一・若宮・西尾張部・北長池・石渡・南堀・北堀などにも分布する。南・北八幡川やその支流である三条堰の灌漑地帯で，西和田・東和田の南部地帯もここに含まれる。その幅は一町よりすこし長くなっている。平林から高田にかけては，条里プランが同一であった可能性が高く，これら善光寺平中央部の条里耕地が，一つの統一計画によるものとすれば，上田市の条里につぐ大規模なものとなる。その詳細は不明で，今後の検討課題である」と述べる。⁽¹³⁾

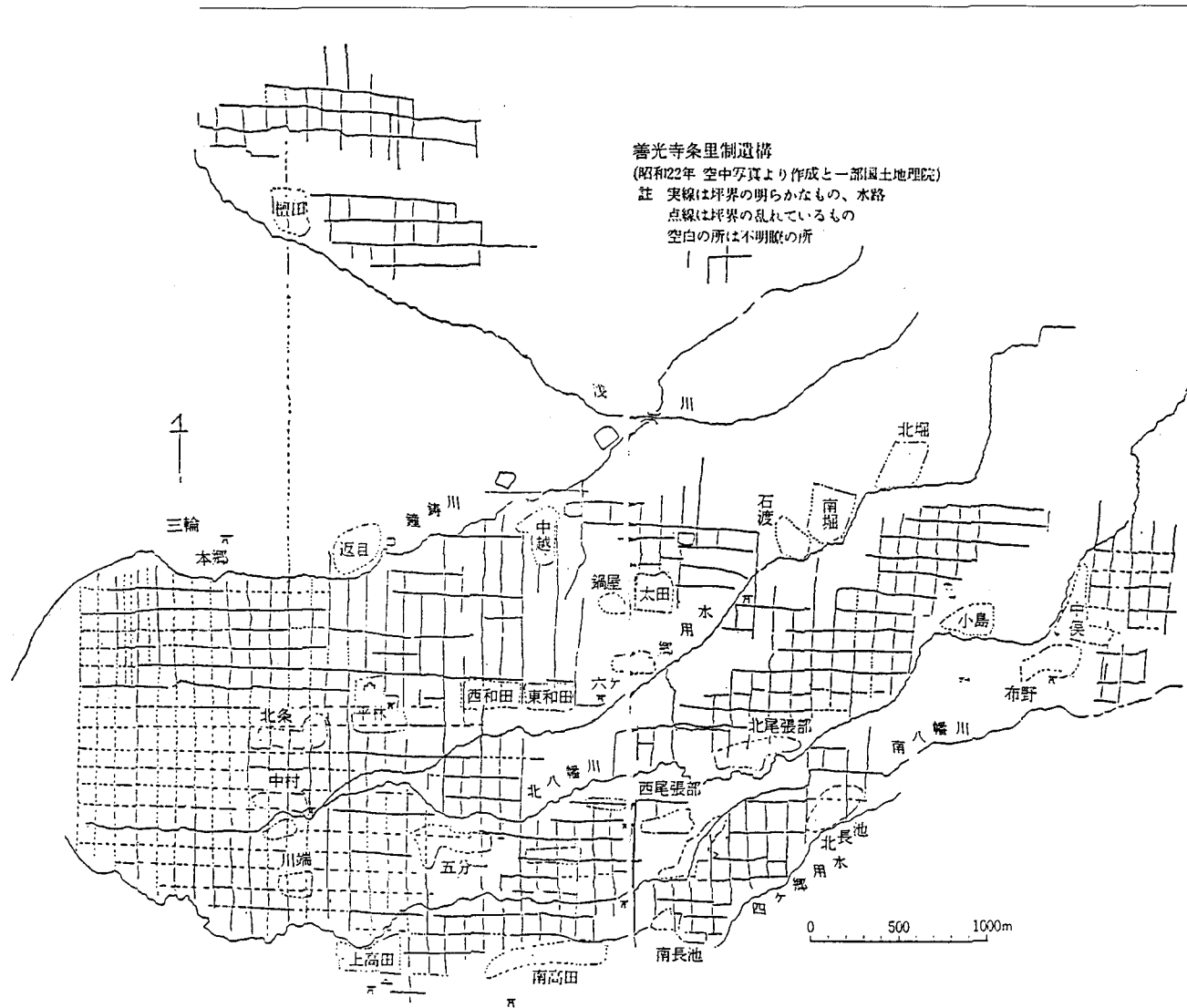


図3 旧長野市街地の条里遺構 (註(5)小出章「善光寺平の条里遺構」より)

その後、前掲小穴論文・小出論文では、昭和22年の米軍写真によって浅川以北の若槻地区も含め、条里を复原している(図3)が、若槻・尾張部・三輪地区の全体が統一したプランのもとに施行されているかどうかについては明言していない。今回、それを再検証すべく復原作業を行って⁽¹⁴⁾みた。その結果以下のような見解を得るにいたった。

(2) 表面条里のプラン1——条里遺構と用水体系

旧長野市街地の条里的遺構は、大別すると①三輪・吉田地区の条里、②古牧・朝陽・柳原地区の条里、浅川以北の③若槻地区の条里の三つの地区に分けることができる。このうち①は『和名抄』の芋井郷に、②は尾張郷および古野郷に、③のうち稲田・徳間・檀田地区は『和名抄』芋井郷に、吉・田子地区は大田郷のうちに属すものと推定される。これを昭和22年(1947)の米軍の空中写真(航空写真)によって条里地割を検討すると、これらの表面条里のプランはほぼ統一的なもので

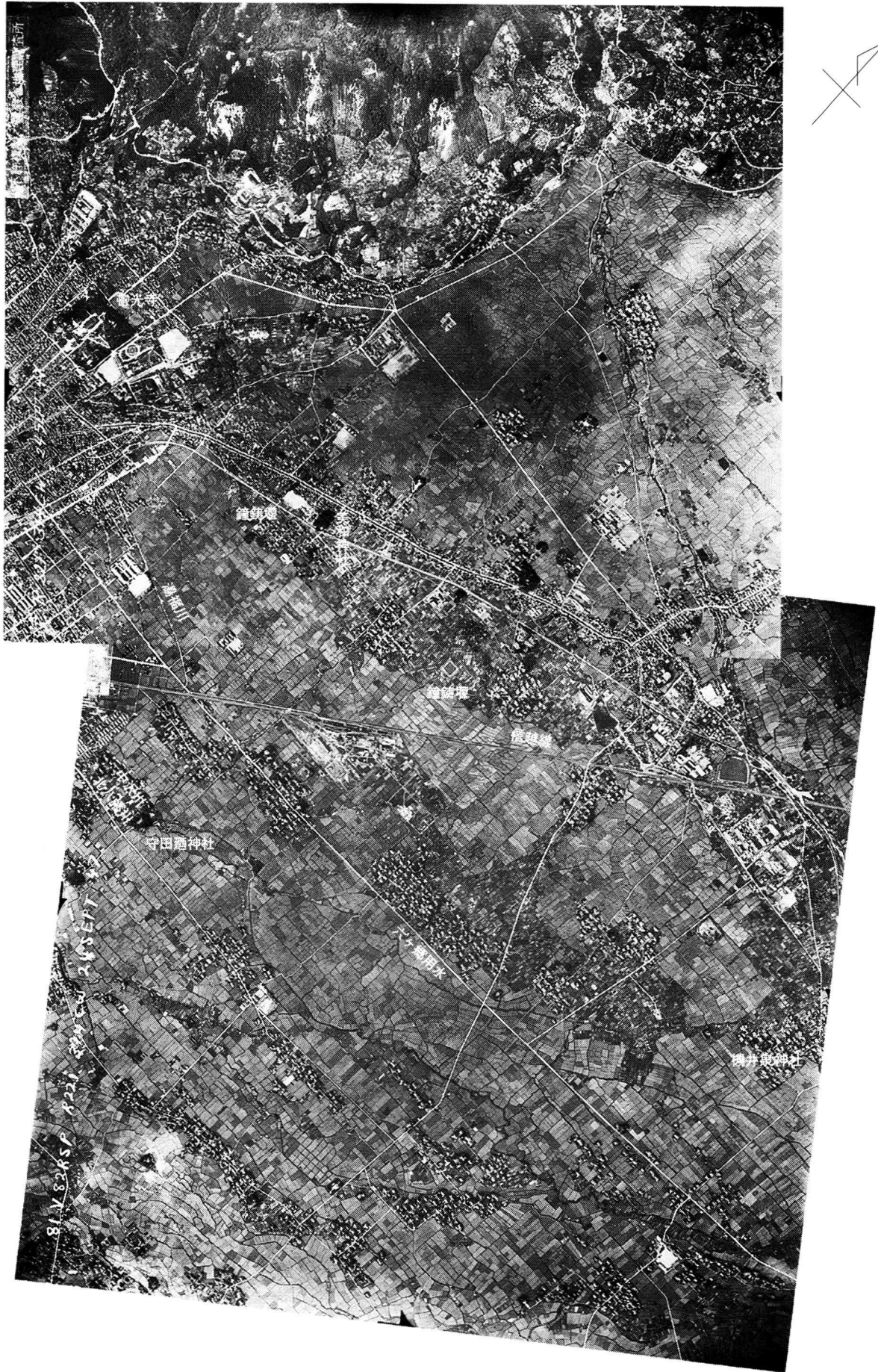


写真1 長野市街地に残る条里遺構（部分） 昭和22年航空写真

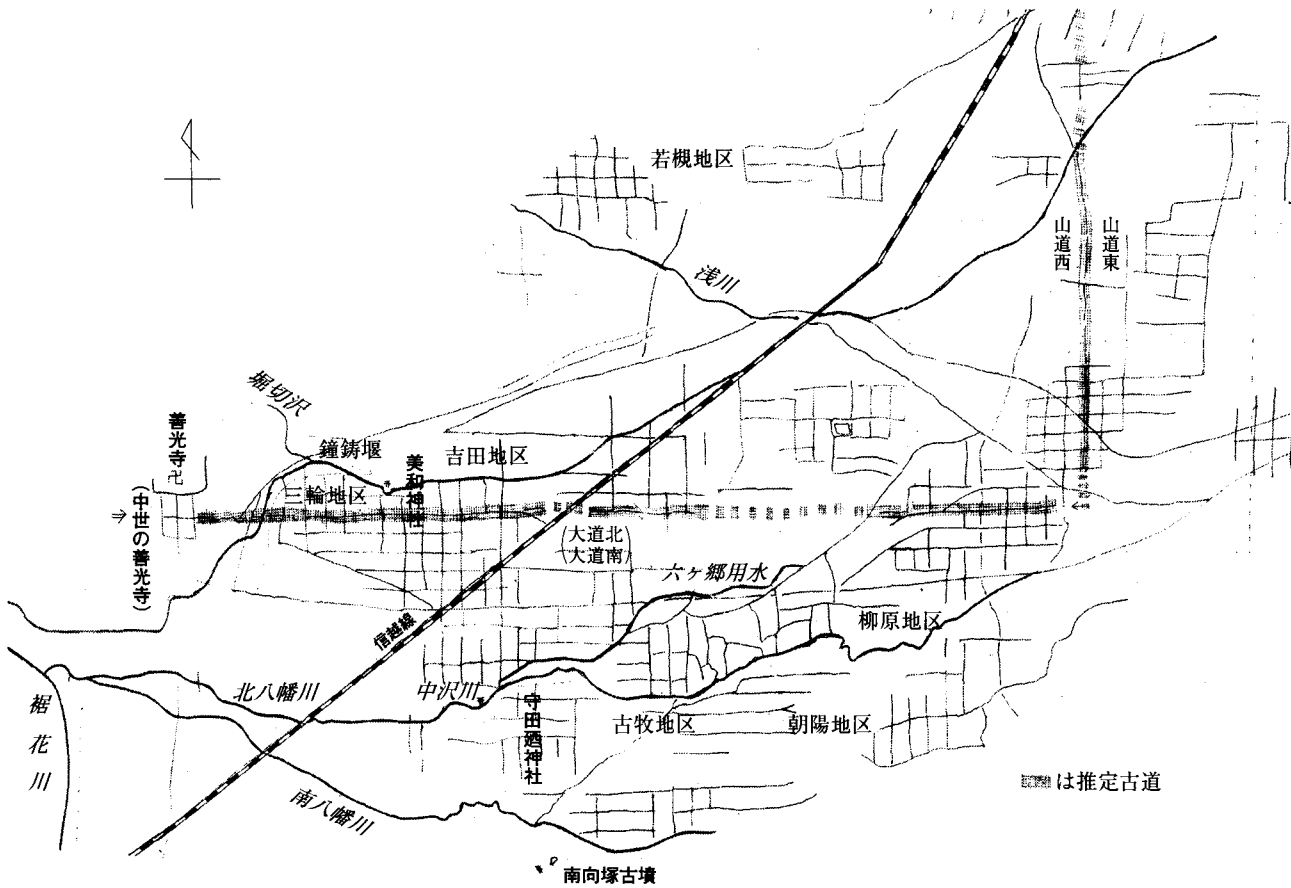


図4 旧長野市街地における条里遺構

あることが確認できる。また、灌漑水系についてみると（図2・4参照）、①三輪吉田地区は鐘鑄堰（川）、②古牧・朝陽・柳原地区は南北八幡川、③若槻地区（浅川以北）は、浅川からの用水（四郎堰など）によっていることがわかる。

そこで、まず南北八幡川を水源とする②の地区についてその条里地割をみると、南北八幡川による灌漑地域のうち、六ヶ郷用水沿いには条里区画が乱れた場所があり、ここは統一性に欠けている（図4・写真1参照）。この条里地割が乱れた地域の地形をみると、緩やかにくぼんだ西側に入り込む谷地形であることがわかる。周辺に比べると窪んだ地形であり、周囲からの水が集まる湿地であった可能性があり、開発が遅れた可能性を考えることができる。

またこの六ヶ郷用水は、守田廼神社付近で北八幡川から分水しているが、中沢川（堰）の下をサイホンで通過するという形をとっている（写真2）。六ヶ郷用水は、その交叉の形式からすると明らかに中沢川よりも後からの開削であると推定できる。この中沢川は平安末期松尾社によって再開発された「今溝」と考えられていること⁽¹⁵⁾から、六ヶ郷用水の開削が平安末以降であることが推測できる。

井原今朝男氏は、六ヶ郷用水を居館分布等の点から鎌倉時代の和田氏の開発を基礎に、室町時代に高梨氏一門が計画的に再開発したと推定しているが、前述の用水の交叉形態からもこのことは裏



写真2 六ヶ郷用水（右奥）と中沢川（堰）（左手前）の交差

付けられると考えられる⁽¹⁶⁾。こうした用水開発の時期の差が、表面条里の統一性を欠く原因ともなっていると考えることができるのである。

以上から、鎌倉期以前の尾張郷の灌漑は裾花川（南北八幡川）によっていたと推定することができる。

次に、『和名抄』芋井郷の地域の灌漑については、湯福川・堀切沢・宇木沢（浅川の分流）と鐘鑄堰との関係が問題になる。このうち、鐘鑄堰が人工的な流路であることは、その流路が善光寺の立地する段丘の等高線に沿って流れていることから理解できるが、その起源については、明らかになっていない。この点を考える手がかりは鐘鑄堰から分流する今溝、すなわち中沢川の起源である。前掲用水系統図（図2）をみると、中沢川は鐘鑄堰から分流していることがわかるから、鐘鑄堰と同時か、あるいは鐘鑄堰の開削後に開かれたものと考えるのが自然であろう。この点については、先に触れたように、中沢川（今溝）は遅くとも平安末期までには開削されたと考えられるから⁽¹⁷⁾、鐘鑄堰は平安時代末期にはすでに存在していたと考えることができるのである。

一方、鐘鑄堰は善光寺の東側で湯福川の下を越え、堀切沢と合流する地点での合流の仕方に特徴がある。すなわち、両者が出会う地点でただちにひとつの流れにならず、しばらく並行に流れたあとに合流し、松林幹線（松林都市下水路）を南下させている点である（写真3）。これはこの合流点以前（以西）の鐘鑄堰が開削される以前には、堀切沢が合流点以後（以東）の現鐘鑄堰の本流であり、また松林幹線の本流でもあった可能性を示している。また宇木沢は、三輪幹線（三輪都市下水路）へと流れ込んでいることから、鐘鑄堰開削以前は、浅川の分流や浅川によって形成された扇状地の扇端からの湧水などによる灌漑であったと考えられる（図6参照）。

小穴芳実氏は三輪地区は当初は宇木沢、湯福川、堀切沢の沢水灌漑で、鐘鑄堰の開発は後になるとしているが⁽¹⁸⁾、鐘鑄堰と堀切沢、宇木沢などとの関係についてみると、おそらくは鐘鑄堰開削以前は堀切沢が現在の松林幹線へ、宇木沢が現在の三輪幹線へと流れ込んでいたものと推定できる。

なお、中沢川（中沢堰）・湯福川・堀切沢（松林幹線）・宇木沢（三輪幹線）がいずれも最終的に守田廻神社付近で合流していることから、「鐘鑄川・中沢川・湯福川・堀切沢と松林幹線の開削は、

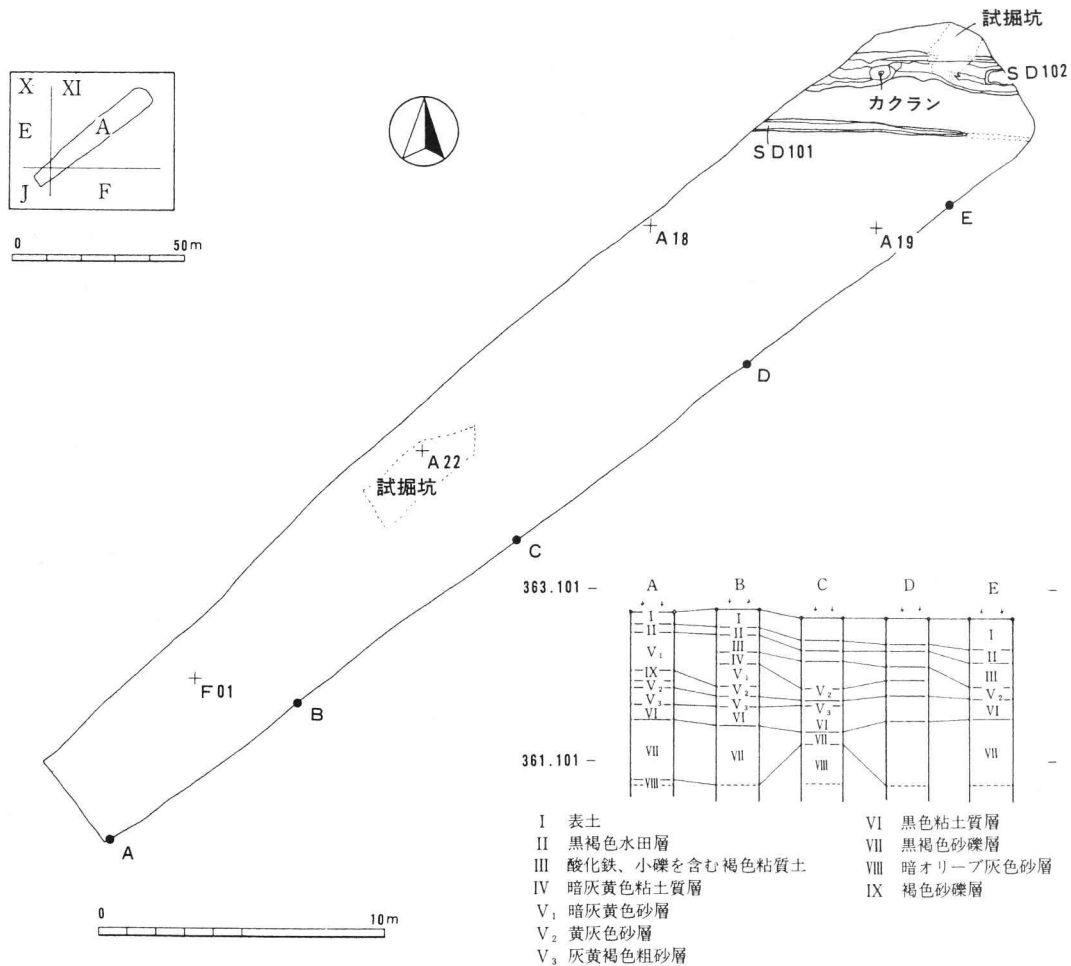


図5 浅川扇状地遺跡群 W7A区遺構図(註(9)報告書より)

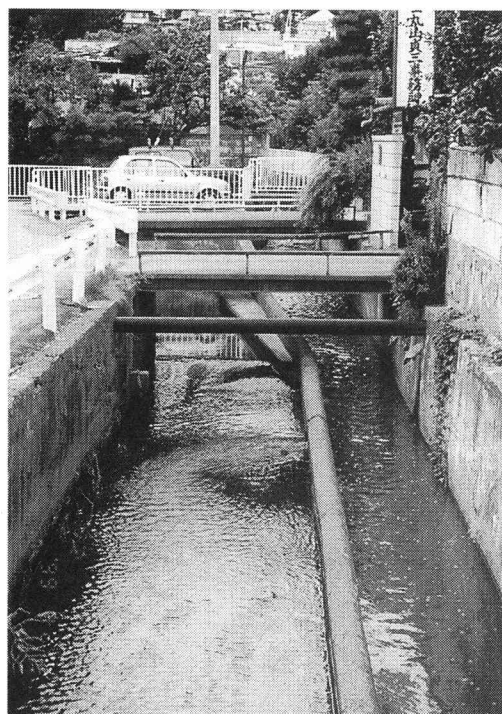


写真3 堀切沢(右)と鐘鑄堰(左)の合流地点

善光寺周辺の山間地からの沢水や押し出しによる災害を最小限に抑えるとともに、これらの排水を集めて灌漑用水として再利用するための合理的な地域開発型の用水システムであった⁽¹⁹⁾と考えられ、こうしたシステムは国衙などの公権力なくしてはできなかったものと考えられるのである。

(3) 表面条里のプラン2——地割と道

次に、地割と道（大畦，官道）に視点をすえてそのプランについてまとめてみる。

まず表面条里の基準線について考えてみる。条里遺構図（図3・4）をみると、北限が美和神社の東側から桐原神社の南の字牧野境付近に延びる東西の道であることがわかる。一方、東西の基準は、美和神社から南へ下りる線ではないかと思われる。このうち北限の道路は返目村の字村西と字山道の字界となっている。この道の四町南には、東西に通称「中道」と称される道が東西に通る。この中道の西には近世以前の善光寺の東門・本堂が位置し、一方中道の東は近世の布野の渡しへと続いている。この道に沿って、西和田には「大道北」「大道南」が、東和田には「大道北」「中道北」「中道南」の地名が残る。千曲川を隔てた対岸は高井郡で、須坂市塩川には「長者屋敷遺跡」が、また同市小河原には「左願寺廃寺遺跡」が存在する。これからは古瓦が出土し、前者の長者屋敷遺跡付近は高井郡家の候補地として注目されており⁽²⁰⁾、また後者からは善光寺境内出土瓦と同一の様式の古瓦が出土し、善光寺前身寺院ないし善光寺境内付近に存在した施設との密接な関係が想定されている⁽²²⁾。こうしてみると、この「中道」は、高井郡から千曲川を渡って善光寺へと一直線につなが道であることが注目される。水内郡家の候補地のひとつである長野市県町遺跡はこの中道のやや南に位置し、この道を通じて高井郡家と接続していた可能性がある。以上のことを勘案すると、この「中道」は条里プランにのった計画的道であることが想定できるのである。

一方、この中道から小島付近で分かれて多古駅に比定される三才地籍へ条里プランに沿って北上するルートが想定できる。それはこの北上のルートに沿って、古里地区の字富竹には「山道東」「山道西」がルートの東西に位置するからである。「山道」地名については、近江・美濃・信濃で「山道」「仙道」「先道」「千道」「千堂」などが東山道ルート上に位置することが明らかにされており、このルートが東山道のルートであった可能性を考えることができるのではないかと思われる⁽²³⁾。この場合、このルートが駅路そのものなのか、あるいは伝路と駅路が共通のルートをとっていたと考えるかということになるが、いずれにしろ、中道のルートは駅路と伝路が共有していたことになると思われる。そして、これを伝路として考えることができるとすれば、西端に位置する現善光寺山門（中世の善光寺本堂）ないしその付近に水内郡家（ないしその前身の評家）が存在した可能性も出てくるのである。また、善光寺前身寺院が水内郡の郡寺だとすれば、この伝路の設定は、水内評の評家ないしその付属寺院（白鳳寺院）を基準に設定したことになるのではないかと思われる。

(4) 表面条里と埋没水田および官道について

以上述べてきたことは、いずれも地表面に残された条里的遺構からの推測である。地表面の条里的遺構の起源については、これを古代における条里的開発とただちに結びつけることには慎重でなければならないが、更埴条里遺跡・石川条里遺跡・川田条里遺跡などの善光寺平の埋没条里がいずれも8世紀後半から9世紀前半に施工されたとする考古学的所見を念頭におくならば、三輪・尾

張部地区を中心とした旧長野市街地の条里地割の施工もほぼ同様の時期と考えていいのではないかと⁽²⁵⁾思われる。推定に推定を重ねることになるが、この地域の条里的開発にとって、八幡川・鐘鑄堰の開削（再開発）は不可欠の条件であるから、これらの用水体系の基本も8世紀末から9世紀初めには整備されていたものとするのが妥当であろう。以上のことから、鐘鑄堰・八幡川の用水路としての起源は8世紀末～9世紀初めと推定しておきたい。

③……………発掘調査の所見から

ここでは、発掘調査の成果のなかで、条里ないし官道に関わる点について触れておきたい。

(1) 浅川扇状地遺跡群と「中道」

北陸新幹線建設に伴う発掘調査で、浅川扇状地遺跡群が調査された。この遺跡群の立地は、『長野県史』通史編1原始古代の「第3章第5節東山道」で「長野市内を通る東山道支道は、安茂里とこの田子を結ぶほぼ直線の道であったことが想定される。（中略）なお綿密な検証にまたなければならぬが、おおよそのところ、いまの信越線の鉄道とほど遠くないところに、かつての東山道が直線状に通っていたと想像される」としているように、東山道と重なる可能性を考えるべきではないかと考えられる。

残念ながら発掘調査報告書の所見にはこの点についての記述は見られない。しかし、先に検討したように、「中道」が東山道（支道）ないしは、水内郡家と高井郡家を結ぶ伝路である可能性があるとするならば、見いだされた遺構の中に、「道」の痕跡を探することもあながち不当なことではないと考える。そこで、「中道」と北陸新幹線の建設予定ルートが交わる地点に関わる報告書の所見を見ると、「W7A区」の北東の端が「中道」のルート上に重なることがわかった。報告書の遺構図面（図5）には東西にSD101、SD102の2本の溝が記録されている。報告書には「幅6m、長さ41mにわたって調査されたが、溝2条が検出されたのみで、遺構は希薄であった。出土遺物も、2号溝（SD102）から土師器20g、遺構外から土師器10gと僅少であり、人間活動の痕跡の少ない地点であることが確認された」と記述されているが、溝の時代や所見は記されていない。ここで断定することは控えたいが、2号溝から土師器が見つかったことから考えて、古代に関わる溝と考えることも可能と考える⁽²⁷⁾。詳細は今後の課題であるが、「中道」の起源が古代にまでさかのぼる可能性を示す遺構として指摘しておきたい。

(2) 石川条里遺跡・篠ノ井遺跡群と東山道

善光寺平における、官道と遺構との関係を考えるとき、石川条里遺跡・篠ノ井遺跡群と東山道支道との関係についても触れておかなければならない。麻績駅から北上して善光寺平に下りた道は、更埴市八幡の更級郡家推定地付近を通り、長野市篠ノ井から川中島扇状地を抜けて犀川を渉り、旧長野市街地に入る。このルートを長野市篠ノ井石川地区で横切る形で建設されたのが長野自動車道である。

これに関わる発掘調査報告書をみると、東山道支道に関わる記述は見られない。前掲『長野県

史』では、西の山際を通過していると想定しているが、これだと石川条里遺跡の中に何らかの遺構が見られるはずである。また、篠ノ井遺跡群は自然堤防上に展開した集落を中心とする遺跡であるが、いずれかの遺跡とほぼ確実に交差するはずの東山道支道に関わる調査所見がないことは、遺構の検出に成功しなかったか、あるいはこれら⁽²⁹⁾の遺跡の調査区の外に東山道支道が通っていたか、のいずれかである。そこで、留意すべきなのは、篠ノ井遺跡群の調査対象とならなかった旧善光寺街道（現在の主要地方道長野上田線）が東山道支道のルート上にある可能性である。これも、今後の検証が必要であるが、東山道支道は前掲『長野県史』が想定した山際のルートではなく、自然堤防上のルートであった可能性が高いのではないかと考えられる。

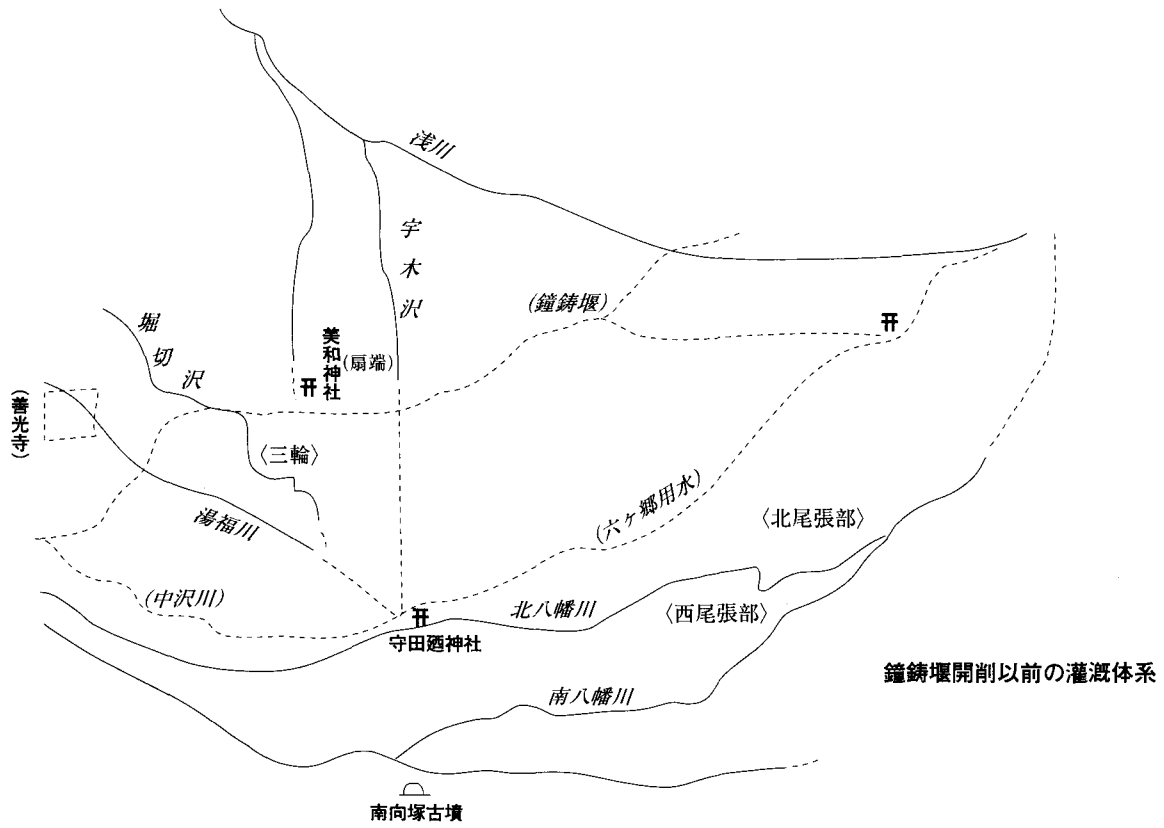
結びにかえて——善光寺平の開発の諸段階

7世紀から8世紀頃の水田遺構や、更級郡家・水内郡家・高井郡家・埴科郡家などの官衙遺構などが考古学的に検出されていない現段階で、表記の問題を詳しくかつ正確に論ずることはできないが、以上述べてきたことをふまえながら古代の善光寺平の開発過程について推定を含めてまとめてみよう。

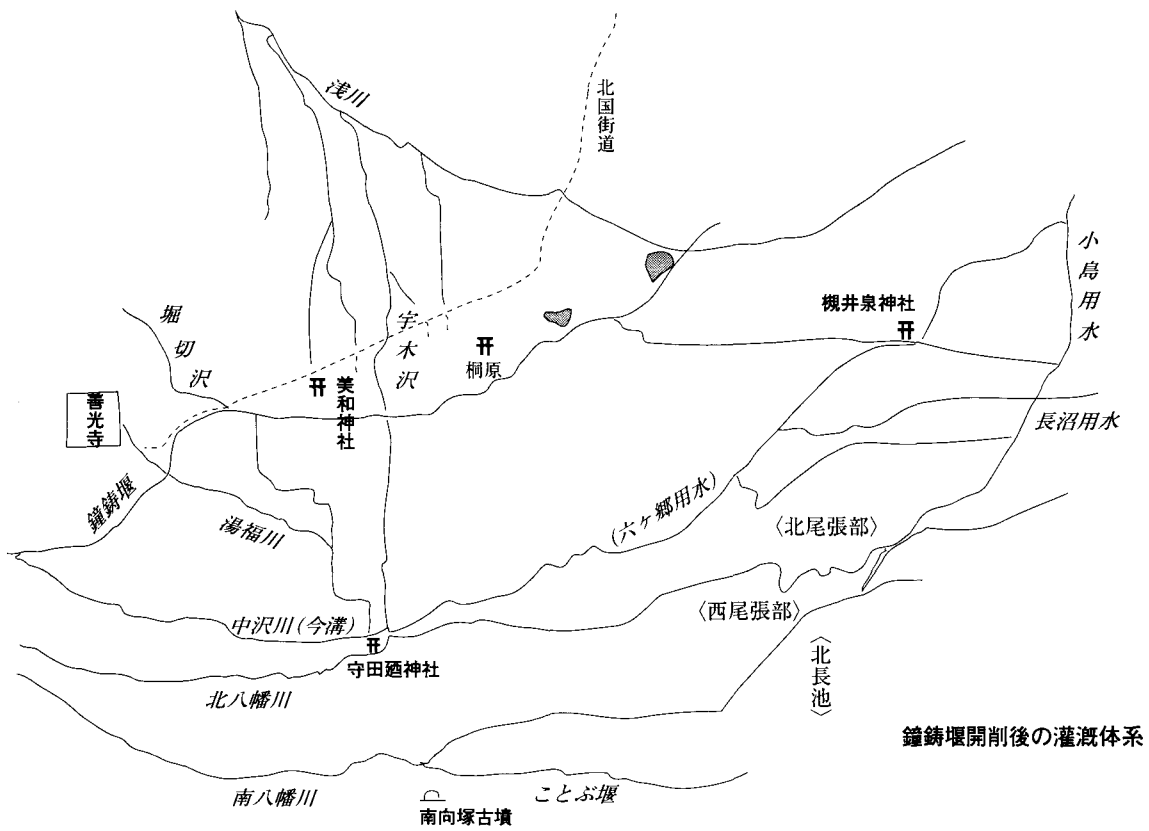
長野自動車道・上信越自動車道や北陸新幹線の建設に伴う発掘調査の結果、善光寺平において条里的区画による耕地開発が行われたのは、8世紀末から9世紀初めの頃であることが判明した。この点から推測すると、旧長野市街地において条里地割が施行されたのもほぼ同じ時期と考えるのが妥当ではないかと思われる。全国的に見れば、東山道などの官道は7世紀末頃までにはすでに開削されていることがわかっており、国・評・里の地方行政組織が整備されるのも7世紀後半の天武・持統朝であることが判明している。そうした点からみれば、地域計画としての条里プランも遅くとも8世紀前半までには成立していたと考えることができる。この点で、川田条里遺跡で奈良時代の層位において、古墳時代の小区画の水田区画と条里的区画が併存していたことが指摘されていることは興味深い⁽³¹⁾。このことは、奈良時代には条里プランが存在し、その一部が実際に条里区画として施工されていた可能性があることを示しているからである。

7世紀後半から末にかけて、地方行政組織が整備され、畿内を中心とする七道制が施行されたが、この時期の善光寺平の行政組織の具体的な姿についてはほとんど不明である。ただ、屋代木簡の検討から、埴科郡と更級郡が一体的な関係にあり、埴科郡屋代郷（更埴市屋代・雨宮付近）周辺に埴科郡家とともに軍団やさらには初期の科野国府ないし国府関連機関が置かれた可能性が指摘されていることは、今後の研究の足がかりを提供している。仮に、7世紀末から8世紀初頭前後に屋代遺跡群周辺に科野国の国府ないしその関連機関が置かれたものとする⁽³²⁾と、当初の東山道・東山道支道のルートはそうした官衙配置と無関係に設定されていたとは考えられないのである。

東山道支道は『延喜式』によれば、麻績駅（東筑摩郡麻績村）から更埴市八幡付近に想定される更科郡家付近を経て、長野市篠ノ井から川中島扇状地を通り、犀川を渡って善光寺付近を通り、田子駅へと抜けるルートである。このうち、善光寺付近から田子駅までのルートについては、善光寺から東へ延びる「中道」ルートが東山道支道ないし高井郡への伝路であった可能性を指摘したが、長野市街地を南西から北東へと抜ける旧善光寺街道ないしそれに沿ったルートが東山道支道のルー



鐘鑄堰開削以前の灌漑体系



鐘鑄堰開削後の灌漑体系

図6 鐘鑄堰開削前後の灌漑体系

トを踏襲している可能性も否定できないのである。⁽³³⁾

一方、埴科郡に国府ないしその関連施設があったと仮定した場合、千曲川右岸を通り屋代遺跡群周辺の地から千曲川を渡って長野市篠ノ井付近へ至るルートも考慮する必要がある。⁽³⁴⁾

ところで、水内郡とりわけ芋井郷の地には水内郡家が存在し、それに付随する寺院（郡寺）も存在したものと考えられている。本稿では、中世の善光寺境内（現在の仁王門）から東へ一直線に延びる「中道」が条里区画に乗る道であることから、これが条里の基準線の一つであり、また中世以前の善光寺の建築プランとも密接に関わった基準線であった可能性を指摘した。この基準線が中世からさらに古代にまでさかのぼりうるとするならば、その発端は7世紀後半頃までには開削されたであろう官道か、あるいは8世紀半ば頃までには成立したであろう「条里プラン」にまでさかのぼりうることになる。善光寺平で条里区画の本格的施行が8世紀末から9世紀にかけての時期であったとすると、旧長野市街地の条里的開発もほぼその時期のものともみることができると考えられる。したがって、鐘鑄堰の開削や八幡川の用水路としての再開発も、その原形はほぼ同時期のものと考えられるのである。

付記

本稿は、1998年3月12日に行われた第4回研究会での報告をもとに加筆したものである。また内容は『長野市誌』編纂に伴う調査に多くを負っている。長野市誌専門部会原始古代中世部会長井原今朝男氏、条里調査を分担した田島公氏には特に種々ご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

註

(1)——善光寺平は、正式には長野盆地であるが、本稿では慣例に従ってこの呼称を用いることにしたい。

(2)——『長野市誌』第二巻 歴史編 原始・古代・中世（長野市 2000年）の「第三章 律令制下の北信濃 第一節 三項北信濃の交通 第四節 二項善光寺平の条里」において、善光寺平（長野盆地）における近年の発掘調査の成果をもふまえ、古代における開発という問題を、条里と官道という視点から叙述した。本稿では、この点について、市誌本体ではふれられなかった問題も含めながら改めて検討するが、叙述が一部重複することをお断りしておきたい。

(3)——本稿で「旧長野市街地」と称するのは、1966年に犀川以南の旧篠ノ井市や千曲川以東の旧松代町と合併する以前の、犀川以北・千曲川以西の市街地のことを指す。

(4)——『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内その3 石川条里遺跡』（財 長野県埋蔵文化財センターほか 1997年）、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10 長野市内その8 川田条里

遺跡』（長野県埋蔵文化財センターほか 2000年）、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴市内その7 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』（長野県埋蔵文化財センターほか 2000年）

(5)——小穴芳実「善光寺平の条里瞥見」（『地域史研究法』信毎書籍 1992年）、小出章「善光寺平の条里遺構」（『文化財信濃』18巻4号 1992年）

(6)——『長野県上高井誌 歴史編』（上高井教育会 1962年）

(7)——前掲註(4)『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10 長野市内その8 川田条里遺跡』

(8)——註(5)前掲論文。

(9)——『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その2 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』（長野県埋蔵文化財センター 1998年）

(10)——『豊野町の歴史』（豊野町誌2 豊野町 1999年）

(11)——室町・戦国時代に千曲川・浅川の氾濫によって10ヶ郷ほどの郷や村が消滅したことについては、『長野

県土地改良史』第1巻歴史編（長野県土地改良組合連合会 1999年。第一章第三節中世村落の形成と稲作の展開〈井原今朝男氏執筆〉）参照。

(12)——註(11)参照。

(13)——『長野県史』通史編原始古代1（長野県史刊行会 1989年）

(14)——条里復原のための調査については、拙稿「長野市域における条里的遺構の調査(1)―古代水内郡芋井郷・尾張郷における条里地割の存在と用水体系―」（『市誌研究ながの』8号）を参照。

(15)——宝月圭吾「信濃国今溝庄の新史料」（『信濃』15巻10号 1963年），前掲註(5)小穴論文，『長野史誌』第2巻歴史編第2編第1章第3節（井原今朝男執筆）などを参照。

(16)——前掲註(11)井原論文。

(17)——註(15)参照。

(18)——前掲註(5)小穴論文。

(19)——註(11)前掲書，76ページ

(20)——ただし，美和神社以北で浅川以南の扇状地にも部分的に条里的地割が残る。この地割が何を基準に施工されたのかについては保留したい。

(21)——原田和彦「千曲川流域における古代寺院―研究の前提として―」（『長野市立博物館紀要』第2号 1994年）

(22)——『長野県上高井誌』（上高井教育会 1962年）

(23)——黒坂周平『東山道の実証的研究』（吉川弘文館 1992年）

(24)——註(4)前掲報告書。

(25)——現在まで，旧長野市街地における埋没水田の発掘調査は，後述する浅川扇状地遺跡群の古墳時代水田跡の検出以外はその成果を聞かない。今後の調査で奈良・平安期以降の水田跡の検出が期待される。ここでは，推論によるところが大きいが一応本文のような仮説を示しておきたい。

(26)——註(9)前掲書。

(27)——W7A区は，その調査区北端で「中道」のルートと重なる位置にある。仮にこれらの溝が「中道」に関わる溝であるとする，道の本体は調査区の北側にあるものと考えられる。なお，報告書掲載の図版も参照して溝のようすをみると，深く掘り込んだようすはなく，しかも途切れている。溝の用途を排水のためと考えるなら，用をなさないことになるが，道路を道路として区画する意味を持っていたという早川泉「武蔵路の素顔―遺構はなにをおしえてくれるか―」（『多摩のあゆみ』88号 1997年）などの指摘を参考にすれば，なおこの溝と「中道」，さらには古代の官道との関わりを考える余地は残ると思う。

(28)——註(4)前掲書，『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内その4 篠ノ井遺跡群』（財 長野県埋蔵文化財センターほか 1997年）

(29)——遺構図の中に南西から北東方向（自然堤防に沿った方向）の溝が何本か走っている。これらは調査所見では，集落内を区画する溝とされており，道の溝と判断することは難しいと思われる。

(30)——中村太一『日本古代国家と計画道路』（吉川弘文館 1996年），同『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン―』（平凡社新書 2000年）。中村氏は，「古代計画道路」の時期について，7世紀初めから10世紀代を6期に分けている。

(31)——註(7)前掲報告書。

(32)——『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23 更埴市内その2 長野県屋代遺跡群出土木簡』（財 長野県埋蔵文化財センター 1996年）

(33)——ただし，旧善光寺街道のルート以外に，旧長野市街地を南西から東北へ条里遺構を斜めに横切る形で官道が通過していた痕跡は，地割・地名ともに見いだせない。

(34)——間室江利子「古代信濃北部の駅路について」（『古代交通研究』8号 1998年）

（長野県立歴史館，国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（2001年1月11日受理，2001年9月4日審査終了）

Ancient Development in the Zenkoji Plain: Focussing on the Jori System Sites in Old Nagano City

FUKUSHIMA Masaki

The Zenkoji Plain (Nagano basin) is one of the largest basins in Nagano Prefecture formed by the Chikuma and Sai Rivers. It measures ten kilometers at its maximum width, thirty kilometers north to south and has an area of three hundred square kilometers. In the area, four ancient counties, Sarashina, Minochi, Takai and Hanishina, bordered one another. According to the number of towns and shrines recorded in the "Wamyosho", it was the most densely populated area in Shinano and was an early leader in development. In this paper the author examines ancient development and irrigation systems by studying the Jori-style sites, and in particular the distribution of them that existed in old Nagano City.

First, these Jori-style sites were part of a unified plan that covered the entire area of old Nagano City. The irrigation system also provides evidence of unification, and there is a great possibility that it was completed in conjunction with the planned excavation of the Kanai and the Hachiman Rivers that drew water from the Susobana River. At present there is no archeological data that directly confirms the period in which this was undertaken, but the results of excavation surveys at the Ishikawa Jori Sites in Sarashina county, the Kawada Jori Sites in Takai county, and the Kōshoku Sites in Hanishina county have indicated that Jori system land divisions were implemented from the end of the eighth century to the beginning of the ninth century. Thus, the writer of this paper hypothesizes that the sites in the Minochi district are also of the same time period.

The road that connects the premodern Zenkoji Temple's East Gate and West Gate (current Nio-mon) runs over Jori-style sites. It was called Nakamichi (Middle Road) in modern times and the author has touched on the possibility that it has a lineage as an ancient road leading toward Takai county that was built at government expense.

In conclusion, in this paper the author presents the current perspective on the first stages of development of the Zenkoji Plain that, according to the hypotheses put forth above, is thought to have occurred from the eighth to ninth centuries.
